

# 公 民 [ 倫 理 ] (100 点 50 分)

2019 年 10 月 29 日 (火) 1 限 実施  
後期① 考査  
千葉県立長生高等学校 第 3 学年 全組  
Edited by K.Kataoka

## 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙はマークシート式です。
- 3 受験番号はアルファベットを数字に直し、次の例のように 5 桁で記入してマークを忘れないこと。  
例 3 年 D 組 1 番 → 30401
- 4 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。



問2 文中の下線部(a)に関して、ユダヤ教の選民思想を表す記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[3] (2010年センター本試験)

- ① 厳しい自然に立ち向かうなかで生まれた信仰であり、世界の創造主が現世に遣わした神の子が、彼らを選びその繁栄と救済を約束した。
- ② 異民族との闘争のなかで生まれた信仰であり、彼らの血統が優れているがゆえに、人格を超えた神が、彼らを永遠の救いに導く約束をした。
- ③ 異民族からの圧迫などの苦難のなかで生まれた信仰であり、唯一の絶対神である人格神が、彼らを選びその繁栄と救済を約束した。
- ④ 厳しい自然に翻弄されるなかで生まれた信仰であり、人格を超えた神である宇宙の根本原理を理解できる彼らだけに、永遠の救いが約束された。

問3 文中の下線部(b)に関して、旧約聖書の中のエピソードとして**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[4]

- ① 神は人を造ったことを後悔し、地上から拭い去ることにした。しかし、信仰心をもっていたヤコブ(イスラエル)は主の恵みを受ける者となった。神はこういった。「すべての肉なるものを終わらせるときが来た。私は地上に洪水をもたらし、すべての肉なるものを滅ぼす。おまえは箱舟を作って家族とともに入れ。
- ② 初めに神は天地を創造した。第1日「光あれ」昼と夜。第2日「大空」天。第3日「地」草、果実。第4日「太陽、月、星」。第5日 水に群がるもの、鳥。第6日 地の獣、家畜、土をはうもの、最後に神は自分をかたどって男と女を創造した。
- ③ 「生まれ故郷を離れ、私が示す土地に行きなさい」という神の命令を受けてアブラム(後にアブラハムと改名)は親族と別れ、妻サライ(後にサラと改名)および彼に同行した甥のロトとともに神の示す地カナンに旅立った。
- ④ ファラオは祭りのためにヘブライ人を荒れ野に連れ出したいというモーセの申し出を拒否した。神はファラオの拒絶ゆえにエジプトに10の災いを与えた。それでもかたくななファラオに対して、神はエジプトに最後の災厄を与えた。エジプトの初子がすべて、人も獣も疫病によって全滅してしまった。しかし、あらかじめ神の指示通りに小羊の血を入口に塗ったヘブライ人の家だけは災厄は起きずに過ぎ越した。

問4 文中の下線部(c)に関して、十戒の内容として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[5]

- ① あなたはいかなる像も造ってはならない
- ② 男子はみな割礼を受けなければならない
- ③ あなたの父母を敬え
- ④ 盗んではならない

問5 文中の下線部(d)に関して、律法の説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[6] (2016年センター本試験)

- ① イスラエル人は、律法を守れば祝福が与えられ、律法を破れば裁きの神としてのヤハウェに厳しく罰せられるとされている。
- ② 律法の中心をなす十戒は、神の絶対性に関わる宗教的な規定(義務)と人間のあり方に関わる道徳的な規定(義務)から成り立っている。
- ③ イスラエル人は、エジプトに移り住む際の心構えとして神から与えられた律法を、神と民との間に結ばれた契約の徴とみなしている。
- ④ 律法に従って神の恩恵に応える限り、イスラエル人は神に選ばれた特別な民として、神から民族の繁栄を約束されている。

問6 文中の下線部(e)に関して、南ユダ王国を滅ぼした国の王の名前として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[7]

- ① ネブカドネザル2世 ② サルゴン2世 ③ キュロス2世 ④ ダレイオス1世

問7 文中の下線部(f)に関して、旧約の預言者として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[8]

- ① エゼキエル ② イザヤ ③ エレミヤ ④ ヨハネ

問8 次の旧約聖書の引用文の出典として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[9]

モーセは、しゅうとでありミディアンの祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブに来た。そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。モーセは言った。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「はい」と答えると、神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。

- ① 民数記 ② 創世記 ③ 出エジプト記 ④ 使徒言行録



問2 文中の下線部(a)に関して、下の福音についての百科事典の記述を読み、空欄[13][14]にはいる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④のうちからそれぞれ一つ選べ。

福音は、一般的に「よい」[13]を意味し、戦いの勝利の[13]とか、子供の誕生の[13]などに用いられた古典ギリシア語「エウアγγελリオン」euaggelion (eu〈よい〉+aggelion〈[13]〉)の訳語である。『旧約聖書』ではヘブライ語「バーサル」bsarという動詞の訳語として「福音を宣(の)べ伝える」(「イザヤ書」61章1〈口語訳聖書〉)が一度だけ出てくる。この語はまた「よき訪れ」(「イザヤ書」40章9、41章27、52章7)という訳語で出ている。

なお、福音は[14]と対立するものとして語られている。神の救いにあずかる道として福音と[14]が取り上げられ、新しい契約である福音がくることによって、初めの契約である[14]は古いものとされた(「ヘブル書」8章6～13、「コリント書」3章6～11)。  
[14]は、人が神の要求を充たすことによって神の祝福が得られる道であり、それに対し、福音とは神がそのひとり子を罪人の身代りに十字架上で罰することによって救いの道を備え、人は神の要求を充たし得ないままで、ただイエス・キリストを信じることによって、神の恵みにより神の祝福にあずかれる道である(「ロマ書」3章20～28)。

野口誠『日本大百科全書』(小学館)より

[13] ① 幸福 ② 教え ③ 恵み ④ 知らせ

[14] ① 創造 ② 律法 ③ 預言 ④ 割礼

問3 文中の下線部(b)に関して、このような祭司階級などの裕福な階級の人々で構成される人々を表す語として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[15]

① エッセネ派 ② パリサイ派 ③ サドカイ派 ④ 熱心党

問4 文中の下線部(c)に関連して、次の福音書の空欄[16]～[18]最も適当なものを、下の①～④のうちからそれぞれ一つ選べ。

祭司長たちや下役たちは、イエスを見ると、「十字架につける。十字架につける」と叫んだ。ピラトは言った。「あなたたちが引き取って、十字架につけるがよい。わたしはこの男に罪を見いだせない。」ユダヤ人たちは答えた。「わたしたちには律法があります。律法によれば、この男は死罪に当たります。[ 16 ]と自称したからです。」ピラトは、この言葉を聞いてますます恐れ、再び総督官邸の中に入って、「お前はどこから来たのか」とイエスに言った。しかし、イエスは答えようとされなかった。そこで、ピラトは言った。「わたしに答えないのか。お前を釈放する権限も、十字架につける権限も、このわたしにあることを知らないのか。」イエスは答えられた。「神から与えられていなければ、わたしに対して何の権限もないはずだ。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪はもっと重い。」

そこで、ピラトはイエスを釈放しようと努めた。しかし、ユダヤ人たちは叫んだ。「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。[ 17 ]と自称する者は皆、皇帝に背いています。」ピラトは、これらの言葉を聞くと、イエスを外に連れ出し、ヘブライ語でガバタ、すなわち「敷石」という場所で、裁判の席に着かせた。それは過越祭の準備の日の、正午ごろであった。ピラトがユダヤ人たちに、「見よ、あなたたちの[ 17 ]だ」と言う

と、彼らは叫んだ。「殺せ。殺せ。十字架につけろ。」ピラトが、「あなたたちの [ 17 ] をわたしが十字架につけるのか」と言うと、祭司長たちは、「わたしたちには、皇帝のほかに。 [ 17 ] はありません」と答えた。

そこで、ピラトは、十字架につけるために、イエスを彼らに引き渡した。こうして、彼らはイエスを引き取った。イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる「されこうべの場所」、すなわちヘブライ語で [ 18 ] という所へ向かわれた。そこで、彼らはイエスを十字架につけた。また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に、十字架につけた。ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、「ナザレのイエス、ユダヤ人の [ 17 ]」と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ。それは、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、『ユダヤ人の [ 17 ]』と書かず、『この男は「ユダヤ人の [ 17 ]」と自称した』と書いてください」と言った。しかし、ピラトは、「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と答えた。

(ヨハネによる福音 19:6-22)

[16] ① 神 ② 王 ③ 王子 ④ 神の子

[17] ① 神 ② 王 ③ 王子 ④ 神の子

[18] ① カルワリオ ② シオン ③ モリヤ ④ ゴルゴタ

問5 文中の下線部(d)に関連して、イエスの語った放蕩息子のたとえの中で、律法主義者をあらわしている人物として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[19]

- ① 使用人 ② 弟 ③ 兄 ④ 父

問6 文中の下線部 (e) に関連して、イエスの説く神の国の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[20] (2011年センター本試験)

- ① ローマ帝国による政治的支配を打破し、神から遣わされた救い主によって立てられる国
- ② 神に選ばれた民であるユダヤ人およびキリスト教への改宗者たちが、入ることを約束された国
- ③ 自らの罪を悔い改めて、互いに愛し合う人々の間に、精神的な出来事として実現する国
- ④ 生前、神から与えられた戒めを守った者が、死後、平安の地として入ることを約束された国

問7 驕る富者に対して批判的であったイエスは富と幸福との関係について、次のように述べている。イエスの神の国についての考え方を踏まえ、この文章の説明として最も適切なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[21] (2012年センター追試)

さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。……しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である、あなたがたはもう慰めを受けている。今満腹している人々、あなたがたは、不幸である、あなたがたは飢えるようになる。今笑っている人々は、不幸である、あなたがたは悲しみ泣くようになる。……」

(『ルカによる福音書』)

- ① イエスは、富が幸福をもたらすという現世の価値観を逆転させ、この世で富を持っている人は、既に神から恩寵を受けているため、もう神の国に行くことができないと述べている。
- ② イエスは、富が幸福をもたらすという現世の価値観を否定し、将来、貧富の差が解消された国家が実現し、今は富を持たない人々も幸福になることを約束している。
- ③ イエスは、富が幸福をもたらすという現世の価値観を逆転させ、この世の富に満足している心の状態のままでは、その人は神の国に入ることはできないと主張している。
- ④ イエスは、富が幸福をもたらすという現世の価値観を否定し、現世において富を持たない人に対してのみ、救済へ至るための実践的な生活規定を教えている。

第3問 次の文章を読み下の問い（問1～問6）に答えよ。（配点 18）

イエスの死後、(a) ペテロたちは、エルサレムを中心として宣教活動を展開した。これが原始キリスト教のはじまりである。やがてキリスト教は、地中海世界のユダヤ人以外の人々のあいだにも広まっていったが、その過程でキリスト教の教義の確立と伝道の両面で大きな働きをしたのが、ユダヤ人 (b) パウロである。彼はもともとパリサイ派に属し、原始キリスト教会の信徒に対する迫害の先頭に立っていた。しかし、その途中で劇的な回心を体験し、やがて一転して、ユダヤ人以外の諸民族に対するキリスト教伝道の先頭に立つことになった。

地中海世界に浸透したキリスト教は、はじめローマ帝国の迫害の対象となったが、4世紀末には、逆に国教の地位を占めることになった。この間、そしてそれにつづく時代に、(c) 教父とよばれる人たちが、ギリシャ哲学、特に [ 22 ] 哲学を用いてキリスト教的真理を説明し、神学の確立に貢献した。こうして、神は何もないところから世界を創造したとする無からの創造の教義、アダムの子孫はすべての人におよんでいるとする原罪の教義、また、「父なる神」と「子なるキリスト」と「聖霊」の三者は実体は一つであるとする三位一体の教義が、このころ確立した。

中でも北アフリカ出身の (d) アウグスティヌスは最大の教父と見なされている。彼はカトリック教会の権威の確立に大きな役割をはたした。彼はギリシャ的な真理への愛は、キリスト教の教える神に出会うことではじめて満たされると考えた。そしてギリシャの四元徳の上に、パウロの説く信仰、[ 23 ]、愛のキリスト教の三元徳をおいた。

中世になると、西ヨーロッパ全体がキリスト教化され、ローマ・カトリック教会は絶大な権威をもつようになった。この時期 (e) 「哲学は神学の侍女」と言われ、その研究はもっぱらキリスト教教義の論証、体系化に向けられた。この哲学は、教会や修道院に付属する学校（スコラ）で研究されたのでスコラ哲学とよばれる。

最大のスコラ哲学者は13世紀に出たトマス・アクィナスで、彼は、[ 24 ] 哲学を用いてキリスト教の信仰内容を理性的に説明しようとした。彼にとって、神学は哲学と矛盾するものではなかった。そして神の恩寵も自然の秩序をみだすものでなく、かえってこれを完成するものであった。信仰と理性の関係でいえば、信仰は、人間理性が見出す神についての理解を、啓示された真理へと秩序づけるものであった。また彼は、このように神、人間、自然を調和的に見る立場から、神が世界を統治する法を人間理性がとらえたものを [ 25 ] 法とした。

問1 文章中の空欄 [ 22 ] ～ [ 25 ] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [22] [ ① アリストテレス      ② ゼノン  
          ③ プラトン            ④ ソクラテス

- [23] [ ① 勇気                    ② 希望  
          ③ 知恵                   ④ 正義

- [24] [ ① アリストテレス      ② ゼノン  
          ③ プラトン            ④ ソクラテス



では、どういうことになるのか。律法は罪であろうか。決してそうではない。……律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が「むさぼるな」と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう。

(新約聖書「ローマの信徒への手紙」より)

- ① 律法を守ることで人間が本当に救われるわけではない。人間は、既にキリストへの信仰により救われて、罪から完全に解放されているので、もはや自らの罪深さに苦しむことはない。
- ② 律法は人間に本当の罪とは何かを教える。人間は、律法で定められた罪に陥らないために、貧しい者や病気の者に金品を施す等の、具体的な行動によって神の愛を表さねばならない。
- ③ 律法を守ることで人間が本当に救われるわけではない。人間は、律法によっては、悪をなすほかない自らの罪を知るだけであり、律法ではなく、キリストへの信仰によって救いに至る。
- ④ 律法は人間に本当の罪とは何かを教える。人間は、十字架につけられて死んだキリストと同様、他者の贖罪のために自らを犠牲にすることで、律法の根底にある神の愛を実践することができる。

問4 下線部(c)に関して、「不合理なるがゆえに我信ず」と述べた教父として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[28]

- ① テルトゥリアヌス ② アヴェロエス ③ アンセルムス ④ ヒエロニムス

問5 下線部(d)に関して、原罪に関するアウグスティヌスの考えを説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[29] (2005年センター追試)

- ① すべての人間は、原初の人間のふるまいに起因する不道德な欲望、つまり原罪を負っている。それゆえ人間は、理性の指導に従い神の实在を論証していく過程を通して、この欲望から解き放たれていき、やがて救済される。
- ② 人間は、天地の初めから、生まれつき自己中心的な性質を神に負わされている。その性質こそが原罪である。人間は自らの自由意志によって神への信仰を選び取り、それを通して神の恩恵を獲得しなければならない。
- ③ この世は善と悪という対立し合う二つの原理から成り立っており、すべての人間は悪の原理、つまり原罪に支配されている。人間は、神に従順であったころの原初状態へと復帰し、そこに全面的に没入することで救済される。
- ④ 原初の人間が自由意志を悪用して神に背いたため、すべての人間は生まれつき原罪を負っている。それゆえ人間は自由意志によってではなく、神からの一方的な恩恵によってのみ救済され、善に向かうことができるようになる。

問6 下線部(e)に関して、次の文中の空欄 [30] に入る人名として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

理性と信仰のこうした安定した関係は、いわゆる12世紀ルネサンスで危機を迎える。それまでキリスト教との関連で考慮されていた哲学がプラトン（ないし新プラトン主義）であったのにたいして、レコンキスタ（スペインでの領土回復）運動、十字軍遠征によるこの第二の古典復興で顔を見せたのはアリストテレス哲学だったからである。スコラ哲学の第二の画期、13世紀のいわゆる盛期スコラ哲学はここに始まる。

キリスト教との矛盾がさけられないアリストテレスの哲学、たとえば「世界の永遠性」や「知性単一説」をどう理解するかが最大の課題になった。ここでアンセルムスの課題が、また新たな解決を求められることになったのである。

イスラーム世界でキリスト教の教義を顧慮せずにアリストテレスを解釈した [ 30 ] は、アリストテレスを人間理性の極致として賛美した。彼を信奉したのはラテン・ [ 30 ] 主義者たちである。彼らの場合には、キリスト教（信仰）の真理とアリストテレスの真理（理性）が背馳することになる。この窮境にたいして彼らがとったのは、「二重真理説」であった。つまり、観点を変えればどちらも真理だというのである。もちろんこれは、キリスト教の真理を脅かす異端であった。

[30] ① オリゲネス ② テルトゥリアヌス ③ アヴェロエス ④ クレメンス



問3 古代インドで展開された思想についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[35] (2017年センター本試験)

- ① ウパニシャッド哲学は、真の自己とされるアートマンは観念的なものにすぎないため、アートマンを完全に捨てて、絶対的なブラフマンと一体化するべきであると説いた。
- ② バラモン教は、聖典ヴェーダを絶対的なものとして重視していたため、ヴェーダの権威を否定して自由な思考を展開する立場を六師外道と呼んで批判した。
- ③ ウパニシャッド哲学では、人間を含むあらゆる生きものが行った行為、すなわち業(カルマ)の善悪に応じて、死後、種々の境遇に生まれ変わると考えられた。
- ④ バラモン教では、唯一なる神の祀(まつ)り方が人々の幸福を左右するという考えに基づいて、祭祀(さいし)を司(つかさど)るバラモンが政治的指導者として社会階層の最上位に位置づけられた。

問4 古代インドで追求された、輪廻を脱した境地の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[ 36 ] (2006年センター本試験)

- ① アートマンの中に変化しない要素はないことを認識し、執着をすてて永遠性を獲得した境地。
- ② アートマンと宇宙的原理が同一であることを直観し、それによって永遠性を獲得した境地。
- ③ アートマンが存在のよりどころとしている身体を不滅なものにすることによって、永遠性を獲得した境地。
- ④ アートマンを創造した神の行為を認識し、神の慈愛による救済を通して、永遠性を獲得した境地。

問5 『ヴェーダ』に描かれるバラモン教の神として、仏教とともに日本に入ってきた神として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[37]

- ① インドラ      ② アフラマズダ      ③ バアル      ④ アーリマン

第5問 次の文章を読み、下の問い（問1～問8）に答えよ。（配点 26）

仏教は、(a)ゴータマ・シッタッタが [ 38 ] の菩提樹の下で開いた悟りをもとにして生まれた宗教であり、その教えの中心は、どうすれば人間は人生の苦しみから解放されるか、その方法について説くところにある。ブッダがめぐまれた環境にありながら出家せざるをえなかったのも、この人生の苦しみからの解放を求めてであった。

ブッダはまず、現実の人生が、いかに幸福そうに見えても、根本においては苦しみにほかならないというきびしい事実の認識から出発する。すなわち、だれもが老い、病み、死ぬことをまぬがれない。そもそも生まれてきたことそのことが苦しみである。これら生・老・病・死の四苦に加えて、さらに愛するものとわかれる苦しみ、にくみうらむものに会う苦しみ、そして [ 39 ] といいた苦があり、結局、身心の働きである (b)五蘊が苦となる。このように人生は自分の欲するままにならないものである。

わたしたちがこのように苦しみ悩む原因は何なのだろうか。ブッダによれば、それは、食・ [ 40 ] ・癡の三毒に代表されるような、わたしたち自身が生み出す悪い心の働き、すなわち (c)煩惱である。したがって、この煩惱の火を消すことによってはじめに、一切の苦しみからの解放が可能となる。しかし、そのためには、この世界をつらぬく真理＝法を洞察しなければならない。なぜなら、この法についての [ 41 ] こそが、もろもろの煩惱の根本原因だからである。

ブッダによれば、その法とは、(d)縁起の法であった。この縁起の法は、別の形で表現すればつぎのようになる。すなわち、この世のすべてのものはたえず変化・生滅するということ、また、すべてのものは (e)さまざまな原因（因）・条件（縁）によって生じたものであって、それ自体で存在している不変の実体は一つもないということである。にもかかわらず、わたしたちはこの縁起の法、 [ 42 ] ・無我の法にそむき、自分一人で生きているかのように錯覚したり、その自分のままで永遠に生きつづけたいと願ったりしている。この自己へのとらわれ（我執）こそ一切の煩惱の根本にあるものである。だからわたしたちは、縁起の法を洞察し、我執をすて去るとき、はじめに一切の苦しみから解放されるのである。ブッダは、この煩惱の火が消えたやすらぎの境地を、 [ 43 ] とよび、これは生死（輪廻）を超越した理想の境地であり、人生の最高目的であると説いた。

問1 文章中の空欄 [ 38 ] ～ [ 43 ] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[38] [ ① ブッダガヤ                      ② クシュナガラ  
          ③ カピラヴァストゥ            ④ サールナート

[39] [ ① 愛別離苦                      ② 生老病死  
          ③ 怨憎会苦                      ④ 求不得苦

[40] [ ① 愚                                  ② 愛  
          ③ 悪                                  ④ 瞋

[41] [ ① 無法                              ② 無明  
          ③ 無記                              ④ 無我



問5 下線部(d)に関して、縁起の法を理解すれば執着を離れることができる理由の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[47] (2017年センター追試験)

- ① ものはいずれも、永遠の実体をもたず、他のものを原因や条件にして生じたり消滅したりするため、執着する心の根底にある「ものは確固たる存在である」という思いは、誤りであると分かるから。
- ② 外界の存在として知覚されるものは、実際には存在しておらず、知覚する者の心を作り出したものにすぎないので、そのような心をもつ限り、知覚する者は、はじめからすべてのものを手に入れていると分かるから。
- ③ ものはいずれも、永遠の実体をもたず、他のものを原因や条件にして生じたり消滅したりするが、それと同じように、執着する心も永遠ではなく、時間の経過とともに静まっていくのが定めであると分かるから。
- ④ 外界の存在として知覚されるものは、実際には存在しておらず、知覚する者の心を作り出したものにすぎないのであり、「ものと心は同一である」と理解することで、真の自我にたどりつけると分かるから。

問6 下線部(e)に関して、次の因と縁についての説明文中的空欄 [48] に入る語として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

例えば、一本の草が生えているとすれば、それは一粒の種（因）が大地や水や養分、太陽や空気など（縁）とうまくあわさってそうなったのであるし、それは瞬時もとどまらず移り変わっており、どれだけ切りきざんでみても、[ 48 ] というようなものはどこにもさがし出すことはできない。あらゆるものがそのようにして存在しているのである。

- ① 草それ自体      ② 草の種      ③ 草の未来      ④ 草の過去

問7 ブッダの教えをまとめた四諦の各々についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[49] (2010年センター本試験)

- ① 苦諦：自分の欲するままにならない苦は、努力で克服するのではなく、人生は苦であると諦(あきら)めることで、心の平安を得られるということ
- ② 集諦：あらゆる存在は、因と縁が集まって生ずるから、実体のない我に固執せず、他者に功德を施すことで救いが得られるということ
- ③ 滅諦：滅は、もともと制するという意味であるが、欲望を無理に抑えようとせず、煩惱がおのずから滅することに任せよということ
- ④ 道諦：快樂にふけることや苦行に専念するという両極端に近づくことなく、正しい修行の道を実践することが肝要であるということ

問8 ゴータマ・ブッダが説いたとされる次の文章では、現世での境遇と業の関係についても述べられている。その趣旨に合致する記述として最も適切なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[50] (2008年センター本試験)

ヴェーダ読誦者の家に生まれ、ヴェーダの文句に親しむバラモンたちも、しばしば悪い行為を行っているのが見られる。そうすれば、現世においては非難せられ、来世においては悪いところに生まれる。(身分の高い)生まれも、かれらが悪いところに生まれまた非難されるのを防ぐことはできない。生まれによって賤(いや)しい人となるのではない。生まれによってバラモンとなるのでもない。行為によって賤しい人ともなり、行為によってバラモンともなる。

(『スッタニパータ』)

- ① 現世での境遇は現世での生まれのみによって決定され、現世での行為は来世での境遇に影響を与える。
- ② 現世での境遇は現世での行為により影響を受けるが、現世での行為は来世での境遇に影響を与えない。
- ③ 現世での境遇は現世での生まれによって決定されることはなく、現世での行為により影響されることもない。
- ④ 現世での境遇は現世での生まれのみによっては決定されず、現世での行為は現世と来世での境遇に影響する。

これで問題は終わりです。